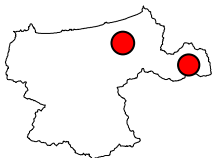



モデル事業名	「まちなか」と「中山間地域」の老人世代交流事業
活動団体名	特定非営利活動法人ラーバンマネジメント
ホームページ	http://rurban-p.sakura.ne.jp/nporurban-p.com/index.html
所属／ 担当者名	特定非営利活動法人ラーバンマネジメント理事：中野 敬教
連絡先	電話：0857-37-0257 Eメール：npo@rurban-p.com
活動地域	鳥取県鳥取市遷喬地区、成器地区（平成21年度は上地地区）
<p>● 活動地域の概要</p> <p>成器地区は千代川水系袋川の水源地域である殿ダム周辺より上流に位置する地区で、現在居住している住民は239世帯（平成22年3月31日現在）であるが、そのほとんどの地区で少子高齢化が進み、既に高齢化率60%を超えている地区もあり、地区の存続の危機に陥っている。また、袋川下流域で中心市街地に位置する遷喬地区に居住している住民は846世帯で鳥取市、中心市街地の空洞化が進み、空き店舗の増加、住民の少子高齢化が顕著である。</p> <p>【位置図】 鳥取市遷喬地区、成器地区 【鳥取市遷喬地区】</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>	
<p>● 活動地域の課題</p> <p>地方自治体の財政逼迫が行政のシステムを硬直化してしまい、地域住民は将来に対する不安を一層募らせている。地域の不満を解消することこそ、地域に元気を取り戻す最良の試みである。元気の三要素は、1に知恵と経験、2に確かな判断力、3に持続する意志であり、これを推進する主力メンバーは、年齢層が50代後半から60代そして70代前半の方々である。このことは「まちなか」でも「中山間地域」でも共通している。</p> <p>そこで、「まちなか」と「中山間地域」が積極的に交流し、知恵を絞っていくことでお互い元気をもらい、元気を与える活動を推進する。</p>	
<p>● 活動の内容</p> <p>(全体)</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 「まちなか」と「中山間地域」の人的資源を結集する自前のコミュニティ施設の整備 退役したが働く余力のある人的資源を結集し、そこを拠点に「まちなか」と「中山間地域」の住民との交流を開始して自立的事業展開の確立を目指す。 ② 朝市の恒常化 現在遷喬地区新町で毎月1回行われている朝市を、「まちなか住民」と「中山間地域生産者」との交流を通じて毎週1回行うことを目指す。 ③ まちなか大学の開催 講師を招き、「まちなかと中山間地域のまちづくり」についての講演会を開催する。 <p>(直近1年間の進捗など)</p> <p>平成22年度は水資源局が公募した水源地域活性化調査業務として交流事業を継続した。前年度は上地地区だけであったが、水源地域である成器地区全体の交流事業として実施した。活動内容は以下のとおりである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 調査事業の実施 <ul style="list-style-type: none"> ◎両地域のコミュニティの自己評価と相互補完体制の可能性について ◎地域間交流から生まれてくる活性化事業について 2. 地域間活性化事業の実施 <ul style="list-style-type: none"> ◎朝市の開催 「水源地域」で生産された野菜等の生産物を、「まちなか」の遷喬地区の空き店舗を借り入れ、そこを拠点として販売する。8月から12月の5ヶ月間2回/月の計10回開催する。 ◎両地域にある伝統的な技術や生活文化の「交流展」を相互に開催する。 ◎「交流展」を基に、両地域が自慢できる資源を整理し、産業や観光振興につながるものを抽出し、情報誌を発行して情報発信を行う。 3. 水源地域の活性化を考える「地域交流大学」の開講 大学の教授を講師として招き、講演会、ワークショップ、報告発表会を開催する。 	

● 活動の成果

・全体

①コミュニティ施設について

◎空き店舗を利用して自前のコミュニティ施設の設置については、位置的には市街地の中心部に位置しており、住民の支持は得られていたと思う。ただ、予想より参加者が少なかったのは、遷喬地区まちづくり協議会の設立が遅れたことによる老人クラブ等関係先への周知が不足した事が最大の原因であると反省している。

②あさいちの継続について

◎中山間地の上地地区からは、まずあさいちの継続により、まちなかとの交流による集落との結びつきを強く大切なものしたいとの要望が強い。

◎交流会で扇の里の山菜弁当を食事したことにより、山間の集落に出かけて山菜の採取と調理の指導を学びたいとの意識が、「まちなか」に高まっている。

◎上記、双方地域の要望を今後、継続可能な事業とするには、NPOとしての活動とその取り組みへの位置づけが求められている。

③老世代交流会について

◎交流会を開催して強く感じたことは、老世代の「生き甲斐」は、それぞれが生活しているスタイルを強く意識するものではなく、「まちなか」と「中山間地」で生活環境の違いを確認しながら、「むらじまん」、「まちじまん」をこれからも語り合える交流の大切さだということ、それを生産的な取り組みに継続したいとの要望が強く、柔軟な発想と他地域の取り組みや研修を重ねていくことが慌てない老世代グループによって確実に今後の展開の発展につながっていくと確信できた。

・直近1年間の成果など

1. 調査事業の実施

遷喬地区と成器地区の65歳以上の方を対象に、「生活環境と生活意識アンケート」を実施し、「生きがい」「やりがい」についての意識調査を行った。

2. 地域間活性化事業の実施

昨年同様遷喬地区の空き店舗を借り入れ、そこを拠点として「水源地域」で生産された野菜等の生産物を販売し、8月から12月まで計10回開催した。また、遷喬地区、成器地区それぞれの公民館で行われた「公民館まつり」においてお互いの地区を紹介する展示を行い、相互訪問する等交流を深めた。

3. 水源地域の活性化を考える「地域交流大学」の開講

東京経済大学森反彰夫教授を講師として招いて講演会を開催した。また、早稲田大学都市・地域研究所後藤秀昭客員研究員を招いてワークショップを開催した。



今後の課題及び展望

・課題

◎コミュニティ施設を設置するにあたり、空き店舗をいろいろ当たったが、どの物件もトイレが無く、対象者がお年寄りということで仮設トイレも用意したが利用頻度は芳しくなかった。

◎あさいちを実施するに当たって遷喬地区のお年寄りを中心と住民が希望する「あさ市お買い物アンケート」を行った。その結果、魚介類の希望が一番だったので、当初予定してなかった魚屋さんを出店する事となったが、事前に意向調査を行って取り組んだことは評価できる。

◎交流会の開催時期があさいちの後だったので、あさいちの時はお互いが手探りの状態で実施した。第2回交流会のワークショップで、あさいちの前に交流会を行っておくべきではなかったかとの意見があり、いろいろな事情があったにせよ綿密に事前打ち合わせをしておれば問題は起きなかったのでは運営方法について課題があった。

・展望

◎「水源地域」と「まちなか」が相互の交流を豊かにすることにより、生き甲斐のある長寿社会形成への関わり方を発見し、それらを通じて両地域が活性化することにより地域が持続し、次世代に渡すことができる。

◎交流会は年寄りが慌てずに堂々と生きている現在を語り、双方の地域の良い面を検証できた。この交流は継続できると考えている。

● その他

助成金による事業から脱却するためには、それぞれの地域が自立しながら交流する事業のやり方、進め方等を今後提案していく必要がある。そのためには、専門家の助言を受けながら、ボランティア活動と営利事業の違いについて識別と見極めの研修交流を活発にすることに取り組みたい。